

## 第3節 信濃の中世・戦国史と小笠原氏城館群

笹本 正治（信州大学人文学部教授）

### 1 小笠原氏と井川館

小笠原氏の系図である「笠系大成」によれば、甲斐源氏の祖とされる源義光（1045～1127）の孫清光（1110～1168）の三男である加賀美遠光（1143～1230）は、文治元年（1185）8月に信濃守に任じられ、信州に移った（ただし系図なので必ずしも確実とはいえない）。小笠原氏の祖の長清（1162～1242）は遠光次男として甲州小笠原館に生まれ、父の所領を相続して小笠原氏を称した。名称のもとになった「小笠原」の地名は甲斐国巨摩郡にあり、現在の山梨県南アルプス市の法善寺（写真1）が居館跡だとされる。長清は父が信濃守に任せられた時に従って、信濃に移ったという。仁治3年（1242）7月15日に長清が亡くなると、その跡は京都六波羅（京都市東山区）の館で長清の嫡男として生まれた長経（1179～1247）、長経の嫡男で信州伊那郡松尾館（飯田市）生まれの長忠（1202～1264）、松尾館で生まれた長政（1222～1294）、松尾館で生まれた長氏（1246～1310）、同じく松尾館で生まれた宗長（1273～1330）と続いた。このような状況からして、小笠原氏は松尾に根拠を置いたものといえる。

宗長の嫡男貞宗は永仁2年（1294）に松尾（飯田市）で生まれ、北条貞時から偏諱（貞の字）を受け、鎌倉幕府に仕えた。元弘の乱（1331～1333）では新田義貞に従い、足利尊氏らとともに後醍醐天皇の討幕運動を鎮圧するため楠木正成の赤坂城（大阪府千早赤阪村）を攻めたが、尊氏が後醍醐天皇に味方するとこれに従い、鎌倉攻めに参加した。この功績により貞宗は建武2年（1335）8月14日に、改めて信濃国の守護に任せられた。建武2年9月27日に貞宗は安曇郡住吉莊（安曇野市）を、貞和3年（正平2・1347）4月26日には近府春近領（塩尻市から松本市島立）を与えられ、信濃府中に進出する足掛かりを得た。そして、館を松尾から信濃府中（松本市）の水が豊富で一帯が井川と呼ばれていた井川に移した（本報告書の小笠原氏城館群において構成の中心をなす要素）。ちなみに、本書の報告の通り井川城址（写真2）の発掘調査から、大規模な造成があったことが明らかになっており、人工的に土を盛り、建物などが造られた地で、井川城の跡に間違いないといえる。

上田から現代の松本に移った古代の信濃国府は、地名などからして惣社近辺にあったと考えられている。貞宗は信府に新たな居館を築こうとしたが、旧来の勢力が握る地域に入り込むことができず、新開発地の井川に居館を構えたのであろう。いずれにしろ、新たな勢力が地域に入っていく場合、どのような場所を基盤にしたか、またどのようにして館を造ったか、守護の館の規模がどのくらいであったか、そこで営まれた生活がどのようなものであったなどを認識し、考察する際、井川城址は大きな価値を持つ遺跡だといえる。

貞宗は建武3年（延元元・1336）に後醍醐天皇が比叡山へ逃れた際、近江坂本（滋賀県大津市）に滞陣し、後醍醐方の兵糧を絶つため琵琶湖の湖上封鎖を行った。その後も北朝側の武将として金ヶ崎の戦い（福井県敦賀市）、青野原の戦い（岐阜県大垣市）など各地を転戦し、暦応3年（興国元・1340）7月には、遠江から信濃南朝方の拠点である伊那谷に入った北条時行を大徳王寺城（伊那市長谷）に破った。貞宗は正平2年（貞和3・1347）5月26日、京都において56歳で死去し、嫡男の政長が家督を相続した。

元応元年（1319）に井川館で生まれた政長は父とともに尊氏に従い、北朝方の武将として各地を転戦した。観応の擾乱（1349～1352）では尊氏・高師直方にいたが、正平6年（觀応2・1351）1月、京の自邸を焼き払って足利直義方に降り、打出浜の戦い（兵庫県芦屋市）に参戦した。正平7年（文和元・1352）10月、尊氏が鎌倉に拠った直義を討つために出陣すると、政長は尊氏軍の先鋒として遠江に出兵し、12月に信濃へ戻り、諫訪直頼・祢津宗貞の軍を小県郡夜山中尾（上田市）に破った。翌年、家督を井川館で生まれた長男の長基に譲った。正平10年（1355）、信濃に拠っていた後醍醐天皇の皇子、信濃宮宗良親王が諫訪氏・

仁科氏ら宮方勢力を結集して挙兵すると、政長や長基らは甲斐の武田氏らとともに鎮圧に当たった（桔梗ヶ原の戦い、塩尻市）。政長は正平20年（貞治4・1365）3月21日に没した。

正平11年（1366）、幕府は信濃守護を長基から上杉朝房（犬懸上杉家）に交代させた。しかし、長基は朝房や国人衆とともに活動を行なっており、信濃における軍事指揮権を維持していたようである。井川館で生まれた次男の長秀は、長基から所領の譲与を受け家督を継いだ。長秀は応永7年（1400）の信濃守護就任に際し、有力国人領主の連合軍（大文字一揆）と大塔合戦を戦い、敗北して京都に逃げ帰った。その結果、幕府は応永8年に守護職を斯波義将に与え、翌年信濃を幕府直轄領とした。長基は応永14年（1407）10月6日に亡くなった。

長秀の弟で井川館に生まれた政康は、応永23年（1416）の上杉禪秀の乱や応永30年の足利義持の乱などで戦功をあげ、応永32年12月15日に信濃守護に補任された。こうして小笠原氏は再び信濃を領することになった。彼は嘉吉2年（1442）8月9日に小県郡海野（東御市）で亡くなり、その跡は長男の宗康が継いだ。

## 2 清宗と林城

小笠原長将の子として応永3年（1396）6月22日に京都四条の館に生まれた持長は、相続に不満を抱き、畠山持国の後ろ盾で家督相続権を主張して、文安3年（1446）に漆田原（長野市）の戦いで宗康を討ち取った。しかし、宗康が事前に弟の光康に家督を譲り、松尾城（館・写真3）に住まわせ、父祖伝来の伊賀良庄全体を支配させており（この一族を松尾小笠原氏と呼ぶ）、畠山持国と対立していた細川持賢と細川勝元が光康を支援したため、持長は小笠原宗家の家督を奪取できなかった。一方、幼少だった宗康の子政秀は伊那に逃れて叔父の光康を頼り、後に鈴岡城（飯田市駄野・写真4）に住んで伊賀良庄の一部を領した（この系統を鈴岡小笠原氏と呼ぶ）。持長は宝徳3年（1451）頃までに信濃守護に任じられ、政康の居た井川（松本市井川城）に住むようになった。

持長の子清宗（1427～1478）は、井川より東約4キロに位置する林（松本市里山辺）に居館を移し、山城の林城（本報告書の小笠原氏城館群を構成する要素）を築いた（この一族を深志小笠原氏あるいは府中小笠原氏と呼ぶ）。戦乱が激しくなったため、清宗は平地に立地し、周囲を水を取り巻いている井川城では、いざという時の対応が難しいので、防御の堅い山城を用意した方がよいと考えたのであろう。同時に小笠原氏の地域への権力浸透が進み、盆地の東部にまで勢力を持つことができるようになったともいえる。林城には大城（写真5）と小城（写真6）があり、中心は大城であるが双方は密接な関係を持ち連動していたと考えられる。

林城は小笠原清宗が井川城がたびたび洪水の被害を受けたため、長禄3年（1489）に築いたとの伝承もあるが、実際の築城年代など不明である。「笠系大成」や「小笠原系図」によれば、長朝は嘉吉3年（1443）信府林館に生まれているので、この頃にはできていた可能性が高い。井川城址の発掘結果からすると、ここで用いられていた瀬戸産陶磁器の年代から、遺物群のピークが15世紀前半にあった。これに対して林山腰遺跡（写真7）などの遺跡群のピークは15世紀末になり、宗清の時期に井川城から林城へと移ったことは間違いかろう。

大城は松本市の東部、金華山という標高846メートルの山全体に構築され、小城は大城の南側の大崇崎の集落を挟むようにして存在し、共に長野県史跡に指定されている。林城の麓には館が設けられていたはずであるが、その場所は確定できていない。可能性としては礎石建ての建物跡と、輸入陶磁などが発掘された林山腰遺跡の場所が考えられる。

なお、この頃山城は数多く造られており、それぞれが連動していた。したがって、林城も単独であったわ

けでなく、同時期周囲に多くの山城が築かれたことが考えられる。

応仁元年（1467）7月15日、清宗は小笠原政秀（政貞）が府中に乱入したため打撃を受けた。そのうえ、深志を根拠とする同族の坂西光雅が急に政秀に味方したので、小笠原勢は混乱に陥って若干の死者を出した。清宗は翌年11月に信府で没した。

その後、信府にいた清宗の子長朝は小笠原政秀と諏訪氏に攻められ、防ぐことができず家に伝わった文書などを携えて、牧之島城（長野市・写真8）に難を避けた。府中を占拠した政秀は自分こそが小笠原の宗家であると主張したが、周囲はもちろん信濃の国人たちも認めなかつたので、和睦する方が有利だと判断して長朝を養子にし、改めて府中を長朝に渡して鈴岡に帰城した。

年未詳の11月3日、政秀は将軍の足利義政より信濃国守護に補任されており、鈴岡小笠原氏の方が、深志小笠原氏よりも優勢だった。鈴岡小笠原家の養子となつた清宗の子長朝は、その後林に帰還した。

### 3 深志小笠原氏の隆盛

政秀は信濃守護としての地位を保ちながら鈴岡城に住んで活動を続け、松尾小笠原氏と対立した。松尾小笠原氏の当主だった光康の子の家長は父の死後わずか4年後の延徳2年（1490）10月15日に没し、子の定基が跡を継いだ。明応2年（1493）正月4日、定基および知久七郎らは政秀を急襲して討ち取つた。これによつて鈴岡小笠原氏は滅亡し、支配力も失われた。下条氏の出であつた政秀の妻から支援を要請された深志の長朝は下条氏とともに定基を攻めた。定基はいったん田中城（飯田市）に逃れたが、甲斐に走り、武田氏の元に身を寄せ、程なく再び松尾へ復帰した。

文亀元年（1501）8月12日、深志の長朝が59歳で没し、家督は寛正2年（1461）に林館で生まれた貞朝が継いだ。一方、小笠原定基は信濃の守護として隣の大名から協力を求められるほどになつたが、永正8年（1511）に亡くなり、その跡は貞忠が嗣いだ。

貞朝は永正12年6月3日に死亡し、永正元年に生まれた嫡男の長棟がその跡を継いだ。長棟は天文2年（1533）7月23日に伊那に着陣して、28日に知久頼元や高遠頼継の軍勢と戦い勝利した。その後、長棟の軍はいったん府中に戻つたが、8月16日に再び伊那に出兵した。天文3年、長棟の軍はついに松尾小笠原氏を圧倒した。そして松尾城に長棟の次男信定を入れ、府中を中心に安曇郡と筑摩郡、それに伊那谷を押えた。一方、敗れた貞忠は甲斐の武田氏を頼つた。

天文6年2月2日、諏訪頼重の軍が塩尻に攻め寄せ、赤木・吉田の辺まで放火し、10月13日には塩尻の城を落とした。天文7年10月13日に長棟は、府内での戦争が思うに任せないからと、諏訪社上社に神鷹2羽を奉納した。翌天文8年の6月26日に小笠原長棟と諏訪頼重との和談がなつた。

長棟は天文11年2月15日に出家し、同18年10月8日に没した。長棟の跡を継いだのが永正11年に信府林の館で生まれた長時で、信濃の守護にも任せられたものであろう。

### 4 長時と信玄

天文14年（1545）4月11日、武田信玄（晴信、信玄を名乗るのは永禄2年・1559からであるが本稿では信玄で統一する）は高遠（伊那市高遠町）攻略のため甲府を出発して、15日に杖突峠に陣を張つた。高遠頼継は17日に高遠城（写真9）を捨てて逃亡した。18日に信玄は高遠へ入り、20日に福与城（箕輪町・写真10）の藤沢頼親を攻撃した。頼親の親戚だった長時は竜ヶ崎城（辰野町）に入つて救援したが、6月1日に福与城が板垣信方軍によって落城させられた。13日に勢いに乗つた信玄軍は長時の領内の塩尻に陣を置き、翌日林城の近辺まで放火した。

その後、佐久を勢力下に置いた信玄は北信から東信地方にかけて勢力を有する村上義清と争うことになつ

た。天文 17 年正月 18 日、信玄は信州が自分の思う通りになつたら働きに応じて所領を与える内容の朱印状を武士たちに与え、士気を鼓舞して 2 月 1 日に村上氏の根拠地の坂木（埴科郡坂城町）に向けて出馬し、上田原（上田市）に陣を張った。対する義清も千曲川を挟んで武田軍と対峙した。武田軍は 14 日、上田原で村上軍と戦って有力武将が次々に戦死して、信玄までが負傷する惨敗を喫した。

長時は武田軍が上田原の戦いで敗れると、信玄を破り諏訪に勢力を扶植する絶好の機会だと判断し、4 月 5 日に村上氏や仁科氏、長時の妹婿で一度信玄に降参した藤沢頼親などとともに諏訪下社に討ち入り、近辺に放火した。6 月 10 日にも再び下社に攻め入ったが、下社の地下人が共同して迎え撃ったため、長時の身辺に仕える馬回りの 17 騎と雑兵 100 人余が討ち取られ、長時も 2 ヶ所に傷を負った。

7 月 10 日、小笠原氏と通じた西方衆や諏訪氏一族の矢島・花岡氏らが、信玄の領する諏訪に乱入した。翌日この知らせを聞いた信玄は即日出馬したが、18 日にやっと大井ヶ森（山梨県北杜市）から諏訪に入った。小笠原長時も 5000 人余の軍勢をそろえ、塩尻峠（写真 11・この塩尻峠は現在国道 20 号線が走る塩尻峠ではなく、南側の勝弦峠とされている）に陣を張った。19 日早朝 6 時頃、小笠原軍は武田軍に急襲された。長時は昨日までゆっくりしていた武田軍が、まさかこれほど迅速に攻めてくると思っておらず、兵も不意をつかれて武具をしっかりと着ける暇もなく、一方的な敗北を喫し、将兵 1000 人余を討ち取られ、ほうほうの体で逃げ帰った。信玄は残った小笠原勢を掃討し、諏訪を安定させて、25 日に馬を上原城（茅野市）に納めた。

信玄は 9 月に諏訪から佐久に入り、前山城（佐久市）を攻めて失地を回復し、背後の憂いを取り除いてから、松本平に攻め込んだ。信玄による小笠原氏攻撃の基地として整備されたのが村井城（松本市芳川村井・写真 12）で、10 月 2 日夕方 6 時頃、高白斎が南南東の方向に向かって鍔立（地鎮祭）を行い、4 日に普請を開始した。村井は小笠原氏の本拠林城の南、約 8 キロメートルの地点なので、長時にとってこの城は喉元に刃を突き付けられたようなものだった。

## 5 信玄の松本平定

信玄は天文 19 年閏 5 月 23 日、甲斐一宮の浅間神社（山梨県笛吹市）に、信府が支配下に入りますようにとの願文を捧げたが、6 月 2 日に姉の今川義元夫人が病死したため出陣が遅れ、7 月 3 日に甲府を出て 10 日に村井に着城した。

一方、長時は 7 月 5 日に將軍の代替わりを祝って太刀や馬などを足利義輝に贈った。將軍と結びつくことで立場を良くしたいと考えたのであろう。しかし、信玄の動きを止めることはできなかった。15 日の夕方 6 時頃に武田軍は林城の出城の一つのイヌイ城を攻め破り、勝どきを挙げて午後 8 時頃に村井の城へ馬を納めた。これを聞いて小笠原方の「子ノ刻大城・深志・岡田・桐原・山家五ヶ所ノ城自落。島立・浅間降」（『高白斎記』という事態になった。五箇所の城の兵は、深夜零時頃みな戦わずして逃亡し（自落）、島立と浅間の城は降参した。ここに見える「大城」こそ林の大城で、筆頭に書かれていることからも小笠原氏側にとって最も重要な城であったことがわかる。この間に山家・洗馬（塩尻市）の三村入道・赤沢・深志の坂西・島立・西牧氏などの小笠原氏のおもだつた侍衆が続々と武田方に寝返った。武田信玄はほとんど兵力を費やすずして府中を手にしたのである。一方、敗れた小笠原長時は平瀬城（松本市）に落ちのび、やがて村上義清を頼った。

『高白斎記』の記載から、大城・深志（写真 13）・岡田（写真 14）・桐原（写真 15）・山家（写真 16）の五箇所の城が連動しながら、武田軍の進撃に備えていたことがわかる。しかし、いずれも戦わないで自落しており、当時山城に逃げ込んでも徹底抗戦することはほとんどなかったことを示している。したがって、当時の山城は現状に残るほど規模が大きくなく、防御制も弱かった可能性がある。

この時落ちた城の中に深志城があり、降参した中に島立氏がいる。島立貞永は林城ができて廃城になって

いた井川館を修築し、深志城と名を改めて入城していたという。しかし、戦乱が厳しくなる中で永正元年（1504）に城を現在の松本城の位置に移し、城を自落させると信玄に味方したのである。深志城はここに出ている城の中では唯一平地の城であった。府中を領した信玄は、新たな信濃経略の基地、および松本平を支配する拠点として深志城を修築することにした。7月19日夕方6時頃に高白斎が北西に向かって鍬立式を行い、信玄も深志にやって来た。その後、23日になって総普請を開始した。

林城は松本平の東の端で、小笠原氏の領地の中では東の端に当たる。また、山城で地域支配のために設けたものでなく、逃げ込むための要素が大きかった。武田氏は松本平全体の支配の拠点となる城を造る必要があった。その点、深志は奈良井川と田川の合流点に近く、後の善光寺街道につながる道路の拠点にもなりえる絶好の場所だった。地域統治のための城と、防衛のための城と一つにあわせて武田氏は深志に城を築いたのである。これが後の松本城の前身になり、その城下町がそのまま現在の松本の町につながる。

一方、小笠原氏の本拠であった林城は前の領主の根拠地ということで、破城された可能性が高い。他の城も前の領主との関係を切るために、城割（破城）がなされ、場合によるとその上で修築が加えられたであろう。

## 6 長時の没落と川中島合戦

信玄は9月9日、村上義清の軍を小県郡戸石城（砥石城、上田市）に攻めて大敗を喫した。これを長時は絶好の機会だと判断し、義清の援助を受けて平瀬城に戻り、深志城を攻め落とそうとした。10月21日に甲府で情報を得ると、信玄は23日に中下条（山梨県甲斐市）まで出陣した。この頃、義清が3000の兵を率いて塔ノ原城（安曇野市・写真17）に陣を張り、長時は水室（松本市）に陣取った。両人の動きに応じた小笠原氏の旧家臣は、武田方に寝返った島立・山家・洗馬・三村氏などの城を陥れた。長時はこの勢いに乗って、翌日深志城に総攻撃を加えることにしたが、信玄の出馬を聞いた義清が長時に無断でその夜のうちに兵を納め、川中島に帰ってしまった。義清は矛先を転じて11月1日に小諸（小諸市）へ移り、13日に野沢・桜井山（共に佐久市）などに放火したので、信玄も翌日若神子（山梨県北杜市）へ向かった。

長時は旧家臣たちを集めて深志城を回復しようとしたが、義清が引き上げたため、従う者は800から1000人ぐらいに減った。小笠原軍が野々宮（松本市）で武田軍を撃退した後、長時は二木氏の山城である中塔城（同）に籠城した。

翌天文20年（1551）2月5日、信玄は信府が手に入った礼として、甲斐一宮浅間神社（山梨県笛吹市）に社領を寄進し、社殿も修復した。5月には先に攻撃して手痛い敗北を喫した戸石城を武田方の真田幸隆（幸綱）が攻略した。10月14日、義清の軍が丹生子（大町市）を陥れたとの情報が甲府に届いたので、信玄は翌日出馬して20日に深志城に入った。武田軍は24日に平瀬城を攻撃して城兵200人余を討ち取り陥落させた。10月27日に武田軍は必死に抵抗する小岩岳城（安曇野市・写真18）を攻めて放火し、翌日、平瀬城の城割を行い、鍬立てをした。信玄は11月17日に諏訪高島城（諏訪市）に馬を納め、21日に甲府に戻った。

天文21年7月27日、信玄は再び小岩岳城攻略のために甲府を出発し、8月1日に至って攻撃を開始した。城兵はよく戦ったが支え切れず、12日に城主が自害し、500人余が討ち取られて落城した。これによって、信濃の中心部である安曇・筑摩の両郡も、ほぼ武田氏の支配下に入った。

小笠原長時は小岩岳城が落城し、日岐大城（生坂村）も落ちると、同年の大晦日に夜陰に乘じて息子の貞慶などとともに草間（中野市）へ向かった。家臣の二木重高・重吉も翌年正月16日に草間へ着き、一行は越後と深い関係にある高梨氏の手引きによって、長尾景虎（上杉謙信。以下、上杉謙信とする）のもとにおもむいて保護を受けた。

長時は天文23年に息子の貞慶などを景虎に託し、弟の信貞がいた下伊那の鈴岡城に入ったが、鈴岡城も

武田軍によって8月7日に落城した。長時は下條（下伊那郡下條村）から新野（阿南町）に出た。ここから駿河（静岡県）を経て、伊勢（三重県）に行き、下宮御師の榎倉武国の元に身を寄せることにした。

翌年の弘治元年（1555）、長時は京都に上って同族の三好長慶を頼った。長時は長慶より摂津芥川（大阪府高槻市）に招かれて厚遇を受けた。後に長時は將軍足利義輝の弓矢の師範となり、河内の高安郡（大阪府中河内郡）において100貫文を給された。この後、永禄6年（1563）7月13日に家臣23人の射手を率いて百手の的を興業するなど、弓矢の家として活躍した。

永禄7年7月に長慶が死に、松永久秀が政権を握ると三好氏は衰えた。永禄11年に織田信長が將軍義昭を奉じて上洛すると、長時が身を寄せていた芥川城が9月末に落城したので、長時と貞慶は上杉謙信を頼った。長時は天正6年（1578）に謙信が亡くなると会津若松（福島県会津若松市）に行き、黒川城主の三浦（蘆名）盛氏のもとに身を寄せた。盛氏も長時を厚遇して、弓矢の師範とした。天正11年2月25日、長時は家臣の坂西弾左衛門によって殺され、故郷に帰ることができないまま生涯を終えた。

天文22年（1553）3月29日、信玄は深志城を発って薊原（松本市）に着いた。翌日、武田軍は薊原城の近辺を放火し、4月2日に城を攻め落し、城主太田長門守を捕虜にした。武田軍の勢いに圧倒されて、この日の夕方には塔ノ原城（安曇野市）も開城した。4月3日、武田軍は会田虚空蔵山（松本市・写真19）へ放火し、薊原城を破却して鍬立を行った。

4月6日、武田勢の先陣が村上義清の本拠地である葛尾城の攻略に向かった。武田軍に抗しきれないと判断した義清は4月9日午前8時頃、葛尾城を自落させた。

葛尾城を失った義清は高梨政頼を介して上杉謙信に助勢を求めた。これに応じて、上杉謙信が信濃に兵を進めてきた。この結果、いわゆる川中島合戦がはじまった。謙信軍は4月22日に村上軍とともに、武田軍と八幡（千曲市）で戦った。これが武田軍と上杉軍の最初の接触であった。その後、上杉軍は布施郷（長野市篠ノ井）で武田軍と戦い、9月1日に武田軍を八幡（千曲市）などで攻破した。

天文24年（弘治元・1555）7月、上杉謙信が村上義清や高梨政頼などの求めによって、信玄を討つために善光寺に兵を進めた。信玄も大塚（長野市青木島町）に陣を置き、19日に両軍が戦った。以後長年にわたって川中島合戦が展開されるが、とりわけ永禄4年（1651）9月10日の第4回川中島合戦は有名である。

## 7 武田家滅亡と木曾義昌

天正3年（1575）5月11日、信玄の子勝頼は三河国長篠（愛知県新城市・写真20）で織田・徳川の連合軍の前に敗北を喫した。勝頼は体勢を建て直すために、天正5年正月22日に北条氏政の妹を妻に迎え、相模と甲斐の同盟を成立させ、長篠合戦以後の孤立無援の状況から抜け出すことができた。

勝頼の立場が強くなったのは、天正6年から翌年にかけて起きた3月13日の上杉謙信の死後における上杉家内部の家督争い（御館の乱）を契機としてであった。この時上杉家には家督相続候補者として、上田郷坂戸（新潟県南魚沼市）の城主長尾政景の次男で、母が謙信の姉に当たる景勝と、北条氏康の七男で元龜元年（1570）に養子となっていた景虎がいた。景勝と景虎では血筋において景勝のほうが謙信に近いものの、景虎には北条氏政という強力な後盾があったために、両人が熾烈な戦いを始めたのである。

景虎の兄である北条氏政は、相・甲同盟もあって、すぐさま越後の隣の信濃を領する勝頼に支援を求めた。これに応じた勝頼が自ら出陣したので、窮地に陥った景勝は窮余の一策として、武田軍先陣の武田信豊に講和の斡旋を頼んだ。結局、勝頼が講和に応じたことあって次第に景勝が有利になり、天正7年3月17日、景虎の籠もる御館（上越市）を攻め落し、景虎は24日に自害した。

当然のことながら景虎が亡くなると、勝頼と北条氏政との関係は悪くなった。氏政は9月5日に徳川家康と勝頼を挾撃することを約束した。一方、天正7年10月20日に勝頼の妹のお菊が春日山城（上越市）に

輿入れをして、勝頼と景勝の盟約はさらに強まった。勝頼と景勝の講和条件には、上杉領の信濃と上野を勝頼へ割譲が入っていたようで、これらの地域を渡した。

『信長公記』によれば、天正 10 年 2 月 1 日に、木曾義昌が織田信長の味方になることを表明し、勝頼を攻め滅ぼすため軍勢を出すよう、苗木（岐阜県中津川市）の遠山久兵衛を通じて申し出た。勝頼親子と信豊は義昌が謀反を起こしたと聞いて、移ったばかりの新府城（山梨県韮崎市）から馬を出し、15000 人ばかりの兵で諫訪の上原（茅野市）に陣を敷いて、武田領国への諸口の警備強化を命じた。

信長は武田攻撃のために軍勢を出すよう命じたので、2 月 3 日に織田信忠・森長可・団景春が先陣として、尾張・美濃の軍勢を率いて、木曽口・岩村口に出撃した。武田方では峠や山道などの要害の場所を抱え、滝之沢（平谷村）に要害を構え、下条信氏を入れておいたが、彼の家老の下条九兵衛が逆心を企て、2 月 6 日に信氏を追い出して、岩村口から河尻秀隆の率いる軍勢を入れてしまった。

2 月 14 日、伊那郡松尾（飯田市）の小笠原信嶺が織田信忠に降った。武田勢はことごとく破れ、北へ北へと逃げ、伊那を北上する織田勢の本隊に追い詰められた。武田軍は 2 月 16 日、木曾から松本への入口に当たる鳥居峠（塩尻市と木祖村の間にある峠）で木曾軍と戦い敗北した。武田方では馬場信春が深志の城に立て籠もり、鳥居峠に向かって対陣した。織田信忠は 16 日に大島城（松川町）の日向宗栄（玄徳斎）などを攻めて敗走させた。

伊那谷で唯一大きな抵抗をみせたのは仁科盛信の籠もった高遠城であった。21 日、これを攻めるために信長は滝川一益・河尻秀隆などに、城への道筋に付城を築かせた。29 日に信忠が仁科盛信に降参を促したが、籠城衆は受け入れなかった。3 月 2 日、織田軍は高遠城を攻めて遂にこれを陥れ、盛信も戦死させた。高遠城が落ちたことで、武田勢の衰弱はさらに加速された。敗戦を重ね、逃げる場所を失った勝頼と子供の信勝などは 11 日、織田軍に敗れて甲斐田野（山梨県甲州市）において自殺した。こうして信濃国全域をも支配下に置いていた戦国大名の武田氏はあっけなく滅亡した。

なお、安曇・筑摩両郡の支配の中心であった深志の城は天正 10 年 2 月に、木曾義昌と信長の弟の織田長益の両人が受け取ったという。

## 8 小笠原貞慶の府中回復

信長は 3 月 23 日に上野および佐久・小県の二郡を滝川一益に与えた。そして翌 24 日、深志城の城米を在陣の諸将士に分け与えた。武田氏の安曇・筑摩両郡の支配の中心地であった深志城には多くの米が蓄えられていたのである。

信長は 3 月 27 日に筑摩郡・安曇郡を木曾義昌に領知させ、義昌が松本平を支配することになった。29 日、信長はこれまで武田氏が領していた地域の知行割をした。甲斐国は河尻秀隆、ただし穴山信君が知行してきた分（河内領）を除く。駿河国は徳川家康。上野国は滝川一益。信濃国高井・水内・更級・埴科の四郡は森長可。木曽谷二郡は木曾の本地、安曇・筑摩二郡は新たに木曾義昌。伊那郡は毛利秀頼。諫訪郡は河尻秀隆に甲斐の穴山分の替地として与える。小県・佐久の二郡は滝川一益。それぞれこのように与えられた。この結果、義昌は本領の木曾郡とともに、新たに安曇・筑摩の二郡を領したのである。

ところが、6 月 2 日に本能寺の変が起き織田信長が亡くなると、旧武田領国は混乱に陥った。長時の子供の貞慶は 6 月 12 日に家康の支援を受けて信濃に帰り、後庁勘兵衛尉に忠節を促した。

小笠原の旧臣たちは景勝の保護を受けていた貞慶の叔父の洞雪（貞種、長時の弟）を迎えて城主にしようとし、二木宗久が使いとなって洞雪を説得した。洞雪は景勝に相談し、景勝が賛同して梶田・八代の両将に 2000 騎を率いて洞雪に従わせた。この結果、洞雪は木曾義昌を深志城から追い出して入城した。

洞雪は深志に入ると、越後・川中島の人々を使って万事の政策を取り仕切った。景勝の家臣は自分たちの

力で洞雪が深志城に入ったとして洞雪を軽んじ、小笠原氏の旧臣たちは自分たちが洞雪を招いたのだから重んじられるだろうと考えたのに結果が逆だったので反発した。そこで小笠原氏旧臣たちは洞雪に替えて、貞慶を城主に迎えることにした。求めに応じた貞慶は7月2日、深志城を奪取しようとして河辺三左衛門に忠勤を促した。貞慶の背後には徳川家康があり、榎原康政は7月5日、深志の調略について後序勘兵衛尉の忠功を賞した。

木曾義昌は貞慶が松本城を回復したと聞き、即座に松本を攻めたが成功せず、木曾に敗走した。貞慶はこれを追撃して木曾氏の領していた本山（塩尻市）に至った。木曾の兵がここを守っていたが、貞慶勢の小笠原孫次郎と犬甘治右衛門が大将となり本山から、まっすぐ義昌の居城である福島口に至った。この時義昌の兵が抵抗したために、押し止められた小笠原軍は夕暮れにもなり、険しい道だったので攻めることができず、かがり火を焼き捨てて退いた。小笠原軍を急に本山に隠れていた兵が襲ったために、孫次郎と治右衛門は戦死した。

7月6日、上杉景勝は西片房家に本領を安堵するとともに、安曇郡飯田（安曇野市）などの地をあてがった。

こうして安曇・筑摩の両郡は、織田信長から正式にこの地を与えられた木曾義昌、徳川家康を背景として旧領だという由緒と意識をもつ小笠原貞慶、上杉景勝を背景とする小笠原貞種、三者の争う場所となった。

7月8日に小笠原貞種は二木重吉に所領を宛がい、また小林采女正にも筑摩郡栗林郷を安堵し、深志城主としての支配を開始した。一方、貞慶は10日に深志城を取り戻そうと恩賞をもって百瀬石見守を誘った。貞慶は16日に貞種を攻め、深志城を回復し、貞種を越後に走らせて、深志を松本と改めた。そして19日に三村勘兵衛等に洗馬の地を与えた。

19日、20日に二木氏の一族が妻子を松本城に籠め、戦の構えをなした。これを見て昔小笠原氏に従っていた者たちが妻や子供を城中に入れた。20日に貞慶は犬甘治右衛門の弟の久知に、本山で討ち死にした治右衛門の名跡を継がせた。こうして、小笠原の軍は次第に形が整ってきたのである。

一方、正統な支配者を自認する義昌は、7月27日に小野内記助に桐原（松本市）の地を宛がい、同郡林郷（同）を預けた。

貞慶は8月4日、犬甘久知に安曇郡犬甘等の所領を安堵し、10日には日岐城（生坂村）攻めに当たっている犬甘久知に、日岐城主仁科盛武の降参を許さないことを知らせ、12日に日岐城を攻めた。

8月9日、徳川家康は木曾義昌に佐久・小県両郡の人質を返すことを求め、あわせて信長が義昌に与えた知行に関してはそれをそのまま認めると申し出た。その上で家康は8月30日に義昌に安曇・筑摩両郡を安堵した。また、9月5日に水上利光等に本領筑摩郡小松（松本市）の地等を安堵した。

9月6日、貞慶は明日日岐へ出馬すると犬甘久知に知らせ、19日に安曇郡の沢渡盛忠に沢渡を安堵した。家康はこれに対抗するように同日、岩間正明に野溝・平田・村井之庄（すべて松本市）などを安堵した。24日に貞慶は下条頼安へ誓紙を送り、後序久親に不届きの行為があつたら召し放つことを約束し、百瀬雅楽助等には埴原等を与える。貞慶の家臣の犬甘貞知が岩垂忠助に筑摩郡埴原郷（松本市）の地を安堵した。貞慶は10月10日に倉科朝軌等に曾山和泉遺跡等を、27日には倉科朝軌に安曇郡内の地を与えた。

上杉景勝も引き続き安曇・筑摩両郡をねらっていた。会田衆などが景勝の支援を受けて矢久城（松本市）に立て籠もったので、貞慶は11月5日に軍を派遣して攻めさせた。結局、堀内越前守を討ち取り城を落とすことができた。9日に北沢孫左衛門尉等に安曇郡内の地等を、また21日には武内縫左衛門に安曇郡内飯田の内等の地を宛がった。

翌天正11年（1583）も貞慶の安曇郡・筑摩郡支配は進展した。正月29日、貞慶は小山佐渡守等の戦功を賞し、閏正月24日には満願寺（安曇野市）に寺領を安堵した。けれども、家臣赤沢式部少輔・古厩因幡守・塔原三河守等が謀反を企てたので、2月12日に式部少輔を攻撃して自殺させ、次いで因幡守・三河守をも

誘殺した。

木曾義昌は2月18日に酒井彦右衛門尉へ北和田（松本市）の地を与え忠節を賞した。

貞慶は2月22日に日岐落着直次第知行の割替えや自ら城普請を行おうとした。そして3月3日、安曇郡千国十人衆に千国跡職を与え、同郡小谷筋を警戒させた。こうして彼は国境近くまで勢力をのばしたのである。

## 9 貞慶と上杉景勝・木曾義昌

4月27日に上杉景勝が麻績城（麻績村）を攻め落とした。5月12日、景勝に属した小田切四郎太郎は、仁科（大町市）において貞慶の兵を破った。貞慶は6月16日に三河岡崎城（愛知県岡崎市）主の石川数正の臣江戸衛門七に書を送り、川中島辺の景勝押領地を取り返すことを約束し、佐久・奥両郡への新道開鑿の命令に応じ難いことを申し出た。こうして貞慶は上杉に対抗するために徳川との連携を密にしたのである。

7月23日、義昌は三村勝親等に両郡回復後知行を宛がうと約束した。貞慶は日岐盛武・穂高内膳佐が異心なき旨を誓ったので、8月7日に身上を保証し、盛武に押野（安曇野市）の地を与えた。11日に日岐盛武の戦功を賞し日岐遺跡をあてがい、また当所務不作により米を給した。

貞慶の子供の貞政（秀政）は永禄12年3月21日に宇治田原（京都府宇治田原町）で生まれたが、三河の家康の元で人質になっていた。天正12年（1584）正月、父に音信を送り年賀を祝した。3月も貞慶の兵が景勝の属城青柳城（筑北村・写真21）を攻め、籠もっていた兵を追い払ったので、景勝は18日に海津城（長野市）の上条宣順、大日向佐渡守等に青柳城を支援させた。小笠原軍は28日に麻績・青柳両城を攻め、4月3日に貞慶は家康から戦功を賞された。

木曾義昌も松本平を得ようと積極的に動き、豊臣秀吉と結び付いた。3月27日、義昌は尾張在陣の豊臣秀吉のもとに書状を送り、徳川方が木曾谷にいたって軍事行動をしたけれども大したことはないと伝えた。義昌は家康から旧領安堵の約束を取り付けたものの、家康が支援する小笠原貞慶がおり、所領を回復することができなかった。そこで立場を有利にするためには、徳川家康についているよりも、より有力と目される秀吉と結び付いたほうが有利だと判断したのであろう。

4月1日、貞慶は木曾の入口にあたる贊川（塩尻市）に住む贊川又兵衛の忠節を賞し、奈良井治部少輔の欠所地等をあてがった。鳥居峠の以北まで貞慶の勢力が及び、木曾氏を圧迫するようになったといえる。次いで倉沢久兵衛にも筑摩郡比奈倉（松本市稻倉）の地をあてがった。19日に上杉景勝が海津城へ出陣するとの情報が入ったので、貞慶は景勝方の麻績城を攻めようとして、仁科衆を更級郡篠木尾へ、犬甘久知を筑摩郡睡峠（眼峠、生坂村）へそれぞれ出陣させた。その後、貞慶軍は景勝軍に麻績城で迎撃されて敗れた。4月21日、景勝は検使島津泰忠に書を送り、泰忠および侍衆の戦功を賞した。間もなく景勝の軍が海津城に兵を引いたので、25日に貞慶は更級郡境に兵を派遣して敵情を監視させた。そうした中で27日、貞慶家臣の溝口貞秀は日岐盛武・宇留賀与兵衛を犬甘久知の陣に派遣し、協力して敵に備えることを申し出た。

その後しばらくの間、両者は均衡状態を保ったが8月に入ると再び関係が緊張し、景勝が信濃に入り、8月3日に景勝は小田切左馬助が貞慶の兵を稻荷山口（千曲市）・青木島（長野市）に迎撃して破ったことを賞した。

## 10 混乱の終結

8月5日に徳川家康は保科正直を菅沼定利の指揮に従わせ、木曾義昌を討つよう命じた。10日、義昌は奈良井十郎に府中の地等を宛てがい、和田小三郎に諸役を免許した。義昌は依然として府中を支配する気があったのである。

8月18日、貞慶は日岐盛武等に川中島進撃の後詰をさせ、宇留賀与兵衛等に牧之島筋（長野市）を調略させた。10月5日に至り、家康は貞慶が木曾に攻め入った戦功を賞した。貞慶は11月2日に贊川又兵衛に所領を宛がった。こうして天正12年末になると、貞慶の松本平支配は安定するようになった。

天正13年（1585）11月15日、石川数正は徳川家康に背き、小笠原貞慶の人質を拉致して岡崎城より豊臣秀吉のもとに走った。秀吉は家康が離反したため来春を期して攻めることにして、10月17日、真田昌幸に小笠原貞慶・木曾義昌等と甲斐・信濃を計略するように命じた。これに応ずるように貞慶は12月13日、溝口貞秀を上洛させようとして針尾（朝日村）の地を宛がった。さらに14日、貞慶は家康と絶交し、高遠城の保科正直を攻めた。

天正14年（1586）2月4日、貞慶から大坂の豊臣秀吉へ派遣された倉科朝軌は木曾馬籠峠（南木曽町と中津川市の間にある峠）で土豪に襲われ死去した。一方、3月3日、徳川方の保科正直は三村親勝に信府が思うようになったら本領を安堵すると約束した。秀吉は10月末までに関東を徳川家康に委ね、上杉景勝に真田昌幸・小笠原貞慶・木曾義昌の所領を家康へ渡すように命じた。11月4日に秀吉は景勝の尽力を嘉し、また昌幸の罪を免じて、知行を安堵した。貞慶は12月24日に家臣の溝口貞秀へ、先に諏訪上社神長の守矢信真から訴えられていた上社社領を明春落着させると約束した。

天正15年（1587）3月18日、小笠原貞慶や真田昌幸等は豊臣秀吉の命令により駿府（静岡市）の徳川家康と会った。これにより貞慶と家康の関係も修正され、一応戦乱状態には終止符が打たれた。

天正17年（1589）正月7日、家康は小笠原の家督を継いだ貞慶の子秀政に所領を安堵した。明らかに小笠原氏は家康の配下として位置付けられたのである。この年の11月24日、秀吉は五箇条からなる宣戦布告状を北条氏につきつけた。天正18年（1590）正月9日、秀吉は上杉景勝へ援軍派遣を報じ、あわせて小笠原貞慶との争いをやめさせた。小田原征伐の一環として景勝と共に武藏八王子城（東京都八王子市）を陥落させた貞慶は、6月28日に家臣の沢渡盛忠等へ戦況を知らせた。小田原攻撃に参加した秀政は相模大磯（神奈川県大磯町）に北條氏直の兵と戦い戦功をあげた。7月6日に小田原城が陥落すると7月13日、秀吉は北条氏の遺領を家康に与え、また諏訪頼忠等の家康の麾下の信濃の諸将を関東に移し、その跡に仙石秀康（秀久）・石川康正（数正）などを信濃に封じた。こうして、信濃の戦乱の時代も幕を閉じた。

天正18年、家康の配下であった秀政は下総古河3万石に移り、さらに信州飯田へと移封された。その後、石川康長の改易によって、慶長18年（1612）に松本へ戻ることになり、城の名称を深志から松本へと変えたのである。

## 11 小笠原氏城館群について

松本市内には多数の館や山城などが存在している。このうち県史跡に指定されているのは「小笠原氏城跡」（入山辺字日影7350ほか）で、林大城・林小城・埴原城・山家城・桐原城からなっている。天文19年の武田信玄侵攻に際して自落したという『高白斎記』に見える「大城・深志・岡田・桐原・山家五ヶ所ノ城」の内、大城と桐原・山家の三城にあたる。同書では最初に武田氏が攻め落とした城を「イヌイ城」としているが、この城は埴原城ではないかといわれている。さらに深志城は後に松本城となり、昭和5年（1930）に国の史跡に指定された。さらに昭和11年には天守・乾小天守・渡櫓・辰巳附櫓・月見櫓の五棟が国宝保存法により国宝に指定され、昭和27年に文化財保護法により改めて国宝に指定されている。つまり、『高白斎記』の天文19年条に記載された城は岡田を除いて国や県の史跡指定を受けており、その評価は極めて高い。

『高白斎記』の記載で残るのは「岡田」であるが、岡田にある大規模な城ということで伊深城に比定される。伊深城跡（岡田伊深1518-口ほか）は昭和42年2月1日に市の特別史跡に指定された。また、同じ時に

井川城址（井川城 1-4552- 口）も指定された。

このほか市特別史跡として、昭和 57 年 12 月 20 日に指定された稻倉城跡（稻倉 1510 ほか）、平成 23 年（2011）3 月 22 日に指定された波多山城跡（波田 8649）、平成 26 年 3 月 5 日に指定された平瀬城跡（島内 9627 イ号ほか・写真 22）がある。このうち稻倉城と平瀬城は前述の林大城・小城、桐原城、山家城、埴原城、伊深城と形態などで類似点が多く、同時期に造られたか大きく修築の手が加えられたものと考えられる。県史跡に指定されている林大城・林小城・埴原城・山家城・桐原城は、それぞれ全国的に見ても規模が大きく、繩張りも見事で、防御制が高く、遺跡の残り方も良い。他県の国の指定を受けている山城と比較しても同等もしくはそれ以上の価値があるように思う。全体として見ると、県史跡は松本市の東側の山麓、特に山辺谷に沿ったところに埴原城を除いて存在しており、小笠原氏の基盤と重なる。

さて、松本平全体、あるいは長野県全体の歴史からすると、古代の信濃において最初に国府が置かれたのは現在の上田市であるが、後に現在の松本市に移された。そして中世信濃の府中（信府）はそのまま松本に置かれた。中世の信濃守護として名高い小笠原氏が府中に入り込み、根拠地として造ったのが井川の館（井川城）であった。その後、戦乱が激しくなる中で館は林に移され、これと連動して林城（大城・小城）が設けられた。この歴史的な流れの向こうに現在国宝となっている松本城が建設された。したがって、長野県の歴史を知るためにには井川城・林大城・小城の三城の理解が欠かせない。それは同時に日本における守護館の成立、その後の展開、戦国の争乱の実態を知る大きな素材ともなる。それ故、本報告書では信濃守護であった小笠原氏が造ったこの三城を特別に「小笠原氏城館群」として、地域の歴史の中から取り上げたのである。

社会変化の中で城や館の跡は開発の危機にある。三城の一つ井川城は平地で松本市街地の中心部に近いこともあって、開発の波に飲み込まれようとしている。歴史的に極めて価値の高いこうした城をきちんと保護し、その実態解明をしていくことは緊急の課題だといえよう。本報告書作成の背後にある社会の変化にも留意する必要がある。

この他に松本市内には史跡として指定されていない山城などがそれこそ無数にある。それらは市特別史跡に指定されているものに劣らず素晴らしい。たとえば早落城（松本市洞・写真 23）は規模が小さいが、山城とは何かを理解するにはコンパクトでわかりやすい。しかも簡単に登ることができる。『高白斎記』に出ている平瀬城跡かとも思われる川合鶴宮神社は何ら研究もされていない。一方で史跡などの指定は地域の研究蓄積の有無ともつながり、地域差が大きい。松本市は平成 17 年 4 月 1 日に東筑摩郡四賀村・南安曇郡安曇村・奈川村・梓川村を、平成 22 年 3 月 30 日に東筑摩郡波田町を編入した。このうち旧四賀村には虚空蔵山城をはじめとして多くの山城があるが、しっかり評価をされておらず、文化財指定にも至っていない。新たに編入した地域の山城研究が進展すれば、松本市の山城全体の評価が変わってくる可能性もある。

ところで、これだけ大規模な山城がたくさんあるにもかかわらず、その築造や修理に関する記録や古文書は残っていない。多くの城の名前が見えるのは本稿で挙げた『高白斎記』の、天文 19 年の条だけである。したがって、古文書や記録を中心とした研究からは、本稿にも明らかなように山城や館の姿が見てこない。だからこそ、山城や館は史料に記されていない、歴史実態を遺構として提示してくれる大変重要な資料・教材であることを、もう一度確認しておきたい。

史料に姿を見せるのが『高白斎記』であることもあって、これまで松本平の山城は武田氏が攻めてくる前の山城の様子をよく伝えていると解され、県史跡指定もそうした理由によって説明してきた。

山城は戦争用の武器であり、逃げ込みの場所であり、地域を押さえたり、他を攻撃したりする際の拠点であった。このため戦争が厳しい時代には常に改修が加えられ、武器や戦法の変化に伴って時代に合ったものに造り替えられていった。史料が存在しないことは、史料に見える時代にのみ造られ、使用されたことを意味するのではないのである。むしろ、史料を作ったり、残したりする暇もないほど戦争の厳しい時代にこそ、

大きな修築などがなされた。一般に武器の進歩などもあって、戦争は時代が下がるほど大きなものになっていくといえる。

そうすると中世における戦乱の時代として、時代名称として戦国時代といわれるよう、中世末、すなわち戦国時代を想起せねばならない。とりわけ信州の戦国時代で考えなければならないは、①地域の領主同士が互いに争っていた時期、②武田信玄が侵攻してきた時期、③武田氏滅亡の時期、④本能寺変後の混乱から全国統一がされる時期、の4つであろう。

山城の規模はこれを造ったり修築したりするに際して、動員をかける築造者の権力の大小によっても決まる。①の時期には地域の領主が造るものであって、数多くの城を大規模に造ることは難しい。②の時期には戦争対処のために必死で山城を造ったり修築したことが考えられるが、基本的には信州の地域領主の規模は大きくなく、一気に大規模化することはできなかつたであろう。③の時期に信濃を押さえた武田家では、城の主体が松本城や海津城のような地域統治の基盤となる平城に置かれ、対織田信長ということで大規模に山城を修築したとは考えがたい。④の時期、信州は全国的に見ても権力者が争つた戦乱の厳しい地であった。本稿は松本平を中心に記したので、触れていないが東信地方には北条氏、北信地方には上杉氏、南信地方には徳川氏、さらに豊臣氏が手をのばそうとしていた。信濃の中心である松本平では、上杉景勝を背後に置く小笠原貞慶の叔父の洞雪（貞種）、徳川家康を背後に置く貞慶、豊臣秀吉を背後に置く木曾義昌が争つた。それだけに山城の修築も背後にいる強大な権力者を前提にすべきで、戦乱の厳しさと権力規模からして、この時期に大規模に手が加えられたと解される。松本平で繰り広げられた戦争は日本の縮図でもあり、それがもともと凝縮されたものであったといえる。

前述のように松本市内に残存する山城は、山家城の高い垂直な石積、桐原城の石積で区画された連続する郭、林大城の大規模な郭、林小城のコンパクトさ、埴原城の堀切の大規模さなど、それぞれ特徴を持つが、石の積み方や全体の構成、背後の堀切などはよく似ており、同時期に築造されたか大規模に改修された可能性が高い。それは松本市内に限らず、安曇野市の塔ノ原城、筑北村の青柳城などともつながる。しかも、それらは武田氏が造ったとされる山城より防御に気を遣つておらず、残存状況もよい。これだけ大規模な山城が多数築造・修築された時期としては、天正10年（1582）の本能寺の変後、とりわけ天正13年までの期間である可能性が高いと私は考える。この時期信府をねらった大名たちが互いに取り合つたのは武田氏の地域支配の拠点だった深志城だったが、これを奪取し、周辺にらみをきかせるためにも、陣地として山城を築く必要があった。それが松本市及びその周辺に残る縄張りの優れ、遺構の残りのよい山城であろう。そしてそれらは必ずしも埴原城や山辺城のような形態だけでなく、広い視野からすると特徴にまとまりがある。

こうした山城は全国的に見ても、その規模の大きさ、縄張りの複雑さ、堀切や切岸、石積などのパーツの見事さ、狭い地域にこれだけ多く残存することなど、注目に値することが極めて多い。とりわけ、山家城や桐原城、埴原城等に見られる石積（写真24）は松本城の石垣技術が伝わる前の段階、この地域での技術の到達点が残されている。逆にこうした山城の特徴や分布状況、数から見ても、いかに激しい戦争が戦国時代最末期の松本平で繰り広げられたかが伝わってくる。

急激に転換する社会の中で多くの山城が存続の危機に瀕している。多数残存する山城のすべてに保護の網をかけることは難しいが、全体の中でどの山城はどのような意義を持ち、どこに価値があるかを見極めた上で、今後これらの山城のうち埴原城や山家城、桐原城、伊深城など、これまで「小笠原系城郭」として高い評価を受けてきた重要ななものだけでもきちんと保護していかねばならない。

ともかく、日本の歴史を古文書や記録だけでなく、城跡という視点から連続的に捉えるためにも、本報告書で扱ってきた井川城、林大城、林小城からなる小笠原氏城館群の保存と活用は緊急の課題である。



写真1 法善寺（南アルプス市）



写真2 井川城址（松本市）



写真3 松尾城（飯田市）



写真4 鈴岡城跡（飯田市）



写真5 林大城遠望



写真6 林小城の石積（松本市）



写真7 林山腰遺跡の発掘（松本市）



写真8 牧之島城の枡形（長野市）



写真 9 高遠城跡（伊那市）



写真 10 福与城跡（箕輪町）



写真 11 塩尻峠合戦の首塚（塩尻市）



写真 12 村井城跡（小屋城、松本市）



写真 13 深志城の後身である松本城



写真 14 伊深城跡背後の堀切（松本市）



写真 15 桐原城の石積（松本市）



写真 16 山家城の石積（松本市）



写真 17 塔ノ原城跡の主郭部分（安曇野市）



写真 18 小岩岳城跡（安曇野市）



写真 19 虚空藏山（松本市）



写真 20 長篠古戦場（愛知県新城市）



写真 21 青柳城の石積（筑北村）



写真 22 平瀬城跡（松本市）



写真 23 早落城（松本市）



写真 24 埴原城の石積（松本市）